

中国ドキュメンタリー映画の源を探り、 作り手たちの熱を写し取ろうとする試み

佐藤賢著

中国ドキュメンタリー映画論



A5判 344頁
平凡社
[本体 5,000円 + 税]

阿部 範之

中国の映画市場が北米に次ぐ世界第二位の規模となったことは、すでに周知の事実であろう。しかし中国で製作される映画は、ブロックバスターに代表される商業的な劇映画作品だけではもちろんない。スターがきらびやかに顔をそろえ、大量の宣伝が投下されるメジャー作品とは別に、政府の検閲を通らない、あるいは市場の選別から漏れ、一般上映の機会が得られないフィルムが、それをはるかに上回る規模で存在することを忘れてはならない。

中華人民共和国の映画史をひもとくと、建国から数年後に民間の映画会社が消滅し、国营撮影所が独占的に映画製作を行う時期が長く続いた。そして一九七〇年代前半を頂点に、プロパガンダに偏った内容を有するフィルムが数多く製作されたが、文化大革命終結後に改革開放政策が実行されると、

創作の機会を得た若い世代の映画人による新しい試みが話題を呼び、世界的に注目される作品も次々と登場した。その一方、市場経済の導入による影響も甚大で、政治的功利性を基盤とした映画体制は、大きく揺らぎ始めた。中国のインディペンデント映画は、まさにその間隙を縫う形で誕生し、一九九〇年代以降、中国の厳しい現実を直視し、社会の周縁に立つ人々の存在に光をあてる作品を世に送り出すことで、検閲を経て劇場公開される一般の作品とは別の映像世界を切り拓いてきたのである。

もちろん、映画製作の自由化が進み、民間企業の進出が相次ぐとともに、様々な他業種による映画への投資が珍しくなくなった現在、独立（インディペンデント）≡地下（アンダーグラウンド）という単純な図式は崩れつつある。しかし中国

ドキュメンタリー映画は、基本的に今も変わらず、アンダーグラウンドに足場を置き、フィクション映画とも、マスコミ報道とも異なる視点から、生活者の姿や社会の様相をとらえ、見る者に強い衝撃を与え続けている。時にそれは、映画の持つ可能性を広げること果敢に挑戦するような斬新な切り口を観客に突きつけもする。それゆえ、中国ドキュメンタリー映画は、日本においても、幅広い関心を集めてきた。例えば、アジア初の国際ドキュメンタリー映画祭として一九八九年から隔年で開催されている山形ドキュメンタリー映画祭(二〇一九年は二〇月一〇日から一七日まで開催)では、中国のドキュメンタリーフィルムが、毎回のようにコンペティション作品に選出されている。中国ドキュメンタリーの代表的監督である王兵(ワン・ピン)に至っては、二〇〇三年に『鉄西区』、二〇〇七年に『鳳鳴(フォンミン)——中国の記憶』で、大賞にあたるロバート&フランシス・フラハティ賞に二度も輝いている。ただし、こうしたフィルムに対し、個別の作品論や作家論を超えた視点から議論を行う環境が、日本において十分整っているとは言えない。それだけに、中国ドキュメンタリー映画論として日本語で書かれた初の単著となる本書は、多くの読者にとって待望の一冊と言えるだろう。また個人的にも、大学院で共に学んだ筆者の研究がこうして刊行さ

れ、書評の機会を与えられたことが大変喜ばしく、また刺激ともなる。

筆者である佐藤賢氏の経歴は、「あとがき」に詳しい。彼は、留学中の体験をきっかけに、中国ドキュメンタリー映画研究に転じ、これまでに数々の論考を発表してきた。それらは本書の原型となっているが、そのほかにも、賈樟柯(ジャ・ジャンクー)のアンソロジーの翻訳(『ジャ・ジャンクー「映画」時代』「中国」を語る)九川哲史と共訳、以文社、二〇〇九年)なども手掛けている。

本書巻末に多くの参考文献が挙げられているように、中国でもドキュメンタリー映画を巡る議論は、盛んではある。ただ管見によれば、何人かの映像作家を取り上げ、彼/彼女らのインタビューやその作品分析を集積したもの、あるいは中国映画の一サブジャンルとしてドキュメンタリー映画をとらえ、その歴史を時代の変化とともに論じる、というものが主である。もちろんそうした論考は示唆に富む内容を含んでおり、資料的価値も高いが、なぜ中国において優れたドキュメンタリーフィルムが次々と現れるに至ったのか、という疑問に直接応えつつ、その痕跡をたどり、道筋を描いたものは稀である。それに対し本書は、創作者たちのネットワーク、またデジタルビデオカメラや海賊版DVDの普及といったトピックに注

目しながら、ドキュメンタリー映画が波及力を持つメディアとして勃興し、広まるに至った背景、あるいは核心的要素に迫ろうとしている。例えば、第4章では、一部のドキュメンタリー映画創作の原点に、シネクラブなどの「映画を見る運動」があったことを指摘しているが、個々の作品に関心を寄せるだけではなく、その土壌となる部分に目を向けた点に、筆者の見識の確かさが感じられる。「はじめに」で生き生きと描かれているように、筆者が研究を始めたきっかけは、創作者たちとの出会いであったわけだが、この著作を血の通ったものにしてしているのは、こうした経験にほかならない。

次に、本書の構成について簡単に説明を加えたい。全体は、研究の動機や概要を簡潔にまとめた「はじめに」、巻末の資料や「あとがき」を除いて、五章からなる。

第1章は、インディペンデントによる中国ドキュメンタリー映画の黎明期に関するもので、呉文光らによる初期の作品や人的ネットワーク、第六世代と呼ばれる映画人たちの当時の創作活動などに焦点が当てられている。

第2章では、小川紳介やフレデリック・ワイズマンといった国外のドキュメンタリー映画監督の影響を受けて、中国ドキュメンタリーが変貌を遂げ、ナレーションが主体であった

テレビドキュメンタリーの世界でも、新しい動きが見られるようになったことなどが論じられている。

第3章では、デジタルビデオカメラの普及がインディペンデント映画、さらに個人による映画製作を容易にするとともに、コストの面でフィルム撮影では難しかった、長時間撮影を実行可能なものとしたことが指摘される。それによって、これまでカメラが向けられてこなかった対象が多く取り上げられるようになるとともに、『鉄西区』のように「外在的なものに頼ることのない直接的な表現」（一九四頁）が生み出されることにもつながった。

第4章は、前述した「映画を見る運動」に関するものである。海賊版映像ソフトの流通は、多くの映画ファンの需要に応えるものであったが、やがてそれは彼／彼女らの交流の場としてのシネクラブの成立と拡充を後押しし、それを通じて構築された人々のつながりが新たな創作や各種の映画祭を生み出す母体となったことが論じられる。

第5章は、三峡ダムや中国現代史をテーマにする作品や、これまで映像を撮られる側にあつた住民に映像を撮らせる活動について紹介しながら、中国ドキュメンタリー映画の新たな可能性に触れている。

以上のように、本書は中国ドキュメンタリー映画の要諦をとらえるべく、射程を広げ、様々な問題に言及している。しかしそれでも、ここで取り上げられているフィルムは氷山の一角に過ぎず、著名な作品が網羅されているわけでもない。ただ実際のところ、ドキュメンタリーフィルムは無数に存在し、しかもその多くが「地下」に潜んでいる以上、その全体を把握し、中立的に記述することは、事実上不可能である。その現実に対し本書は、第1章で出現、第5章で今、とクロノロジカルな流れをゆるやかに示しながら、筆者がその過程を一つの運動ととらえる上で欠かすことのできない作品に絞って読解を施し、そこから具体的なイメージを浮かび上がらせる、という手法を取る。こうして読者は、筆者の視座を共有することで、中国ドキュメンタリー映画が築く壮大な風景の一端

を覗くことができるのだ。

ただし本書は、上記のことにも関係する、いくつかの問題を含んでいる。確かに本書は、中国ドキュメンタリー映画を見通す上で有力な視座を提供しているとは言え、それが唯一のものとは断言できるわけではない。だとすれば様々な観点がある中で、筆者がどういう方法論あるいは理論に基づいてこうした角度から議論を展開するに至ったのか、それは先行研究とは何が異なるのか、といった点についての言及が不可欠なはずである。また本書では、「ドキュメンタリー」のほか、「地下」、「独立」など重要な概念がいくつか繰り返し登場するが、それぞれの定義、およびそれらの関係性が、明確に述べられているとは言えない。さらに、本書の元となった博士論文では、十全なものとは言えないものの終章が置かれてい

松村茂樹著 書と画を論じる

研文選書 29

文人が創作した書と画を論じることで、中国文化の本質的理解を志向し、日本における受容から日中文人のネットワークを考察。図版多数。

近代中国の文化人と書 松村茂樹著

3 000円

呉昌碩研究 松村茂樹著

7 000円

既刊

浅見洋二著
中国宋代文学の圏域 草稿と言論統制

6 000円

川島優子著
『金瓶梅』の構想とその受容

7 000円

井上徹著
華と夷の間 II 明代儒教化と宗族

8 000円

木下彪
国分青厓と明治大正昭和の漢詩界

12 000円

研文出版 <税別>

東京・神田神保町2-7 ☎3261-9337
http://www.kenbunshuppan.com/

たのに対し、本書ではそれに該当するものではなく、「あとがき」があるに過ぎない。本書が最終的に何を明らかにしたのかを示すためにも、結論となる章は設けるべきだったのではないか。そのほか、本書において、中国ドキュメンタリー映画の輪郭は「運動」という形で描かれているが、それは、中国ないし世界の映画史の中ではどのように位置づけるべきものなのか、また中国の社会や文化の中では、どのような意味を有することなのか、といった根本的な疑問は、積み残されただけである。

ただし、こうした問題点があるとは言え、研究書でありながら、限定された一部の専門家を越えた広い層の興味、関心に沿うものとして、本書が上梓された意義は大きく、中国ドキュメンタリー映画に対する知識や理解を深めるための礎となることは間違いない。その上で、筆者が本書を足掛かりに、十分追求せずに終わった問題に焦点を当て、より充実した議論を打ち立てること、そしてまた、新たな作品との魅力的な対話をさらに重ねていくことを強く期待したい。

スマートフォン の普及によって映像の偏在化が急速に広がるなど、映画を取り巻く環境は、どの国でも日夜大きく変化している。このような状況下で、中国ドキュメンタリー映画は、今後どのような方向に顕著な動きを示していくのだろうか

か。中国ドキュメンタリー映画が一つの運動をなすとすれば、その行く末を見届けていくことも、今後の大きな課題となるべきだろう。

(あべ・のりゆき 同志社大学)